

# 一手一つの奮起と実動を

本部員 高井猶久先生 お話し(9月月次祭講話)要旨

# かさおか

発行所  
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311

## 笠岡大教会 創立110周年

三年千日スローガン

論達を實踐し、をやの理を戴こう

本年の實踐項目

- 一、おさづけの取り次ぎ
- 一、陽気ぐらし講座と百万軒にをいがけ
- 一、一万人のおぢばがえり

### 百周年を 迎える意味

十一月二十九日、全教のをやと仰ぐ真柱様がこの教会にお入り込みにな

変わろうと思わなければならないと思います。思つてもなかなか変われないというのは人間の性ですが、をやの理を戴いて、水に流すものは水に流して成人させてもらおう、それが、百周年を迎える意味だと思えます。

りますが、真柱様は、大教会といえども、滅多にお出でいただくことのできないお方ですから、ただ、百十年だからお祝いするとうようなことではなく、これを一つの吉祥として、今までの通り来たりの道を反省してみて、それぞれの立場の上からさせてもらわなければと思つていることや、今までのいろんなわだかまり・しがらみ、それぞ

をお道の教会・信仰者は、をやの理を戴かなければ、ことがうまく運ばないことが多いので、生みの親・育ての親・理の親……とにかく親と名の付くものには、しつかり喜んでもらうということが一番大事です。をやに理を立てるということはそういうことだと思えます。

れを、変わる、あるいは、

上級に理を立てるとは上級の会長さんに、大教会に理を立てるとは大教会長さんに、おぢばに理を立てるとは真柱様に、喜んでもらうということ、その中にいろんな不思議も現われてきます。

を、変わる、あるいは、

お互い、このお道を信仰しながら、何もなしと

### 心機一転、世界たすけの旬

ときにこそ、理の思案をしなければなりません。そう考えれば、こうしてをやが入り込んでくださるといふのは、滅多にないチャンスですから、こういうときに、今までのことを清算して新しい出発をしなければなりません。

特に時句の理から言えば、真柱様がお代わりになつて、『論達第一号』を聴かせていただき、論達の精神徹底の上から「ようぼく躍進地方講習会」が開催され、そしてまた、地方における推進役の教会長さんにリーダーシップをしつかり執つて頑張ってもらおうという上から「教会長おやさ講習会」も開かれました。

論達の冒頭に「世界たすけ」ということが出てきます。このお道の本来の目的は「世界たすけ」ですが、今までの道すがらを考えると、個人の事情や身上のたすかりが主でした。言うなれば、人間が心得違いをするので、その心得違いに対して事情や身上をして見せて心の入れ替えを望まれ



懇切にお話くださる高井先生

た。そして、心の入れ替えができた人たちに對して不思議を見せて、親神様の存在を教えてくれた。百年経った今日、少なくともこの日本では、天理教という名前もあらあ行き渡ってきた。そして、これから世界たすけが始まるという、今は、その時句です。

世界たすけは何から始めるかといえば、隣から隣へ、自分以外は全部世界だと教えていた。だきました。先ず、隣から隣へ、にをいがけをしなさい、おさづけを使いなさいということです。とにかく銘々がしつかりおさづけを取り次がせていただいで、不思議をお見せいただかなければなりません。ましてや、心機一転、世界たすけの時句です。心機一転というのは、何も新しく事を始めるのではなく、今まででも、よふぼくとして、日々の

生活の中で——あの人に声を掛けてあげたら、この人を手助けしてあげたら、ここが汚れているなあ——と気が付いていても、忙しかったり恥ずかしかつたりしてできなかったことを、こまめに一言の話もしなさい、声も掛けなさい、手助けもしなさい、そして、身上者にはしつかりおさづけを取り次ぎなさい、それが心機一転です。

真実を尽くしていこう

よく、おさづけが効くとか効かないとか言われますが、親神様の御守護が効く効かないというよな言い方は、それこそ、神様に申し訳ない話で、もし、そういう言い方が許されるなら、効かないおさづけはない、必ず効きます。ただ、こちらの願い通りに働いてくださるか否

掛かった。当時の政府の力からすれば、まだ小さかった天理教を潰すくらいのは、何でもないとはいえなかったのに潰れなかった。なぜ潰れなかったかといえば、当時、親神様の不思議を見せられ、「誰が何とどうも天理教をやめない！」という人が多かったということです。それこそ、雨後の筍のごとく不思議がどんどん現われた。

当時、死に病といえれば肺病。死に病といつてもすぐに死ぬわけではなく何年もかかって次第に瘦せ細り、しかも人に移るので、病院の完備されていかなかった当時、肺病の人は家で寝ていて、そういう家は、人に嫌われた。

そういう家へ布教して回った。聞いたこともない神名を唱えて拜ましてもらおうとしても、当然、断られる。断られても、断られても、そこへ訪ねていく。余り何遍もくるので罵倒する、頭からバケツの水を掛けられる、それでも、また行く。余りしつこく来るので、「そこまで心配してくれるのなら、肺病の親爺の痰壺を呑め」と言われて、一息に飲み干した。

こんな話はいくらでも残っています。

「痰壺を呑め」と言えば逃げて帰ると思ったら、呑んだ。もう、好きにしろ」となって、水垢離はとる、断食はする、おぢばへ帰らんかいでお願ひしてきておさづけする——おたすけ人として有りと有らゆることをその当時の布教師はしたのです。

か、神様の御思案の中ですから、こちらの願い通りに働いてくださらないときには、自分の心定めなり相手の精神なりを省みて、徹底して御守護いただく、までつとめさせていただく、ということがなければなりません。お道は、大正年間、非常に大きく伸展しました。時の政府は、天理教は邪教だといって、秘密訓令を出して、天理教を潰しに

確かに、不思議が次々と現われた。しかし、反面、いわゆる御守護いただけずに出直してしまつた人も結構たくさんいました。

それなら、不思議を見せられた家の人が熱心になつたかといえ、そうではない。それでは、御守護いただけなかつた人の家族は誰も信仰しなかつたのかといえ、これもそうでもない。

そこで、事後、続けて信仰するかどうかはどこで決まるのか。それは、おたすけ人の真実です。

まさか呑むと思わなかつた痰壺を呑んだ。実の子供にもできないことを、このどの馬の骨とも分らない天理教の布教師がやつた。ああもした、こうもした、そして、挙げ句の果てに死んだ。子供たちにしてみれば、いくら親でも、人から嫌われる病気で何年も寝ていたら、看病疲れでヘトヘトになり、内心ホツとして、どうかすれば涙も出ない。ところが、その天理教の布教師は、涙をポロポロこぼして、「私の真実が届きませんでした。申し訳ありませんでした。」と、土下座して詫びる姿——そういう姿に接して、信仰する人は信仰したのです。

こう考えると、病気が治るか否かではなく、どこまで真実を尽くし切るかが問題なのです。

今の世の中は、それこそ、何が本当か嘘か分けの分からない時代、ある意味では、非常ににいがけのしにくい時代。神様のお話をともに聴こうとする者もいないし、話してみても、いくらでも理屈が返ってくる。けれども、こういう時代だ

けに、本物を求める人も多いのです。

お道の方々は、皆さん、概して真面目で熱心です。しかし、七・八分は一生懸命やっても、それから先になつたら、最後、折り合うところまでいかに諦めることが多い。

こんな時代であるだけに、こちらが真実を尽くし切つたら、お道を信仰してくださる方はまだまだいると思います。問題は、よふばくがそこまでできるかどうかです。

ところが、「なぜできないのか」といえば、「結構すぎる」という返事が返ってきます。これほど、神様に申し訳ない言い方はありません。

お互いの初代は、なぜ、お道を信仰したのでしょか。

事情や身上であちこちの医者や神様をさんざん探し回つて、最後、どうにもならないようになって、嫌いな天理教の話を知るといふ場合が多い。初代の方々は、天理教の話を知り、いんねんを自覚し、「こんないんねんは孫子に残すわけにはいかん。自分一代限りで、家のいんねんを全部見せてください」というような心定めをした。そして、一生懸命、おたすけに励んだ。苦勞の中へ我が身を投じた。貧乏しながら、コツコツ布教して、そして、代が重なつて、今日、結構になつたのです。

その神様から与えられた結構さがあるがゆえに、神様の御用が務まらないというのは、それこそ、神様に申し訳ないと言わざるを得ません。

### いんねん納消の道

また、理の親—理の子・上級—部内という線上に、お互いのいんねんを見せられております。いんねんあつて理の親—理の子となり、上級—部内となつて。そして、その中にいろんな姿が見せられる。それは、間違いなく自分のいんねんです。その見せられた姿を、自分のいんねんとして、自分がどうさんげをしお詫びをするか、そのさんげとお詫びからおたすけが始まらなければなりません。

「昔は不思議がたくさんあつたのに、この頃は少ない」という声もよく聞きますが、そういう声が出てくるのは、おたすけが他人事になっているからではないでしょうか。

一つ間違えば、「あの人は俺がたすけた」ということになりませんが、そこに見せられた姿を、自分のいんねんとして、自分がどうさんげをしお詫びをするかが大切で、そうしておたすけにかつたときに、初めて、そこに不思議をお見せいただけます。

また、お道の者の祈りの方法も自分・個人の事情・身上のお願いではなく、世界で苦しむ人たちのために祈る、ひのきしんをする、おつとめをする、おつくしをする、というような人のためにどんなこともさしてもらおうという祈りに変わつてこなければならぬのではないのでしょうか。

世界中、どこの国でも、身上・事情は非常に苦しい。早く楽になりたいという気持ちは、人間である限り同じです。

そういうことを御守護いただくことのできる道は、このお道だけです。おつとめ以外に人をたすける道はありません。

地球上の半分以上の国々が開発途上国といわれていますが、難民と言われる大勢の人たちを、どうやってたすけられますか。物ですか、お金でしょうか。これは、おつとめを措いて外にはありません。

人間というものは、一人ひとり、自分自身の前生・前々生からの通り来たりの道によって、今生、食べる与え・着る与え、その他諸々の与えを頂いて生かされている。言うなれば、与えの無い方々の特徴といえ、一口に言う、感謝がない、恩が分からない。それでも、少ない程度の与えがあるから、人間としてこの世に生を享けている、それも事実です。

だから、そういう方々に、おつとめを通して、その小さな与えを喜ぶことを教えてあげると、少しずつよくなり、与えが増えてくる、年限かけて通る内に結構になってくる。そういうことを教えられるのはおつとめしかありません。

人間というものは、なかなか、思うようにいかないことの方が多い。「思うように成らぬがいんねん」です。

事情というものは、その大小に拘わらず、「自

分は正しい、相手が間違っている」というのがその特徴です。

「自分の意見を堂々と言いなさい」というような教育をしていますから、今、自己中心に物事を考える人が多い。そういう性格の人は他人から嫌われる。自分の身の回りから人の与えが無くなる。物や金というものは、人に付いてくるので、いい人が周りから離れていけば、物や金も自然に我が身から離れていく。無い無いづくめでどうにもならなくなってくる。最終的には、神様から貸して頂いている身体を自分の思うように使わせてもらえなくなる。それが身上です。

多くのよふぼくは病気が治ることを最終目的に話しておたすけをしています、これは勘違いです。その人の前段階に必ず心得違いがあるから事情・身上が起るのであって、神様が、なぜそういうことをしておられるのかを、相手に分かってもらえるように、よふぼくは、道を説かなければなりません。

### 一日一日、身に行なおう

それぞれの町などで、三分の一の人が、大なり小なり親神様の御守護が分かるようになれば、物事の見方・受け止め方・思案の仕方、そういうものもお道的になってくる。そういうところへ、何も知らない人が入ってきてても同化されて自然にそういう考え方をするようになってくる。

そういうふうを考えていけば、親神様が、世界一れつ残らずたすけ上げたいと思召される親神様の御理想は、夢でなくなるということですよ。

その原動力になるのは、よふぼく一人ひとりが、どこまで、そういう気になってやってくださるかです。一人ひとりが精一杯つとめさせていただくことによって、丸々の御守護を頂くということに繋がっていくわけです。

今は、本当に大変な世の中ですが、お互いお道の者がしつかり真実を尽くし、至るところでひのきしんをし、身上の人を見たら片っ端からおさづけを取り次ぐということが、対外的に始まっていかなければなりません。

今、ちょうどこういう旬に、この教会が百周年を迎えて真柱様にお入り込みをいただくことができる。それこそ、そういうことを始めさせていただくのに、一番良い旬を、神様からお与えていただいているのです。

いずれにしても吉祥がなければ変わりません。目前に大きな吉祥を与えられ、新しい出発をされる皆様には、最高のチャンスだと存じます。

笠岡に繋がる皆さん方、そういうことをしつかりお考えいただいて、とにかくもう、自分の利害や都合を一切捨てて、しっかりとをやの声に添って、をやに喜んでもらえるように、百十周年に向けて、一日一日、身に行なうてつとめていただくということ、ひとつ、しっかりと頑張ってもらいたいと思います。

# 心を通ひ路

## 時旬に見せて頂いた大節

出雲分教会 前原布教所長

高島 哲雄

ドスン!!  
今の音、何?

お父さんがたおれてる。早く、皆な来て、電話して。おさづけを早く早く。救急車を呼んで。呼吸していない、心臓がとまっている。何とかして心臓だけは動かしてないと脳がやられる。必死で人工呼吸する。心臓が動き出す。

今年の九月三十日の朝七時の出来事、何と言う事。やはり親神様は大変なりつづく。布教所は引取られるのかなと、私の頭の中をよぎった。

大教会百十周年記念祭を一年後にひかえた昨年、教会の中で大変な事情がおきている事をきき、全身の血の気がひくおもいをしたのが、たおれる一カ月前の八月。

何かのすがたを見せて頂くだろうと覚悟はしていたものの、あまりにもきびしい現実・・・やつと医者にあずける事が出来た。けれども医者は「出来るだけの事はしますけれども覚悟をして下さい」一言。大動脈瘤破裂とのこと。

頭の中はまっ白。子供たちと顔を見合せ「けれどもな、お父さんの信仰のすがたは並ではなかった。親神様には厳しく向合い、まさかの時に動いて下さる信仰と、常に口にして、厳しいと言つて良い毎日だった。このすがたを無駄にしてはダメ。何かをやらせてもらおう。」

親神様は私共に何をおっしゃっているのだろう。はつきり私共にわかるようにおしえて下さい。とこのたびほど思つた事はない。

大教会の記念祭には、真柱様をお迎えしておこなわれる。この時旬に、この現実を見せていただいた私共。背筋に針金を一本とおした様な気がする。

心をよせ合つて固まつたお供をさせていたのだ。あの方この方とたくさんのかたがたの心をよせていただき病院の婦長さんからは「この人はたくさんの人たちに見守られて天理教の教祖さんのような人です」とよろこんでくださった。

ない命をつないでいただき一年をむかえる事が出来、九月本部月次祭には孫たちをつれ、にぎやかに御礼参拝をさせていただき、一人おちば帰りの声にのせていただくことが出来た。

この大教会百十周年記念祭の時旬に、ない命をも助けて頂き、親の理を頂ける、すばらしい旬である事を、身をもって体験させていただきました。

親神様、ありがとうございます。

## 一年生の想い

鶴南分教会長 酒本 嘉子

私は此の六月にお許しを頂いたばかりの新米の教会長でございます。

私の実家は代々仏教でしたが御縁がありまして天理教にお引き寄せ頂きました。

昭和二十五年の夏、主人(前会長)が盲腸から腹膜炎を併発し、あと数時間の命と二人の医師より手を離されてしまいました。鶴山分教会の前会長様のおさづけにより一夜の内に鮮やかな御守護を頂きました。

以来五十有余年無事にお連れ通り頂きました。永い道中には雨の日、風の日、又、嵐の日もありましたが、目の当りに見せて頂いた親神様の御姿に勇気づけられ、教祖におすがりしながら御恩報じの一念で通らせて頂きました。

昨年十一月に主人が出直しましたが何年も主人に寄りかゝつて通つて参りましたので、つかえ棒ははずされた今、なれない立場にあたふたと、ろたえて居ります。

亀田山分教会の前会長様が「自己への布教を」と書いて居られたましたが、『かさおか』第40号(第7巻)、私も初心に帰る一から出直さなければいけないと思つて居ります。自身自身を見つめ直し自らを律し



# 九月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎しんで申し上げます

親神様には一列子供の陽気ぐらしが見たいとの温かく慈しみ深い親心のままに自由の御守護を下さり日々は結構に恙なくお連れ通り下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございますしかしながらその親心はおろか一列兄弟の理さえも忘れてただ民族や宗教や国に囚われ兄弟同士がいがみ合い傷つけ合う姿が未だに無くならない事は誠に申し訳なくひとえにお引き寄せ頂いた私共の成人の至らな事故の事と日々反省を重ねつつ成人を目指してつとめとさづけを通してたすけ一条の上に勤め励ませて頂いております その中にも今日の吉日は九月の月次祭を執り行う日柄でございますので只今からおつとめ奉仕者一同今日の日を樂しみに寄り集いました道の子供達と相共に心を一つに睦み合わせて明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめさせて頂きます 皆の真実の状を御覧下さいますして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本日は記念祭にお入り込み下さいます真柱様の随行員をお勤め下さる高井猶久先生と島村廣義先生に視察打ち合わせの為お入り込みを頂いておりますので後程高井先生より親しくお話を頂戴しお聞かせ頂く一つ一つをしつかり心に治めて成人へと歩みを進めさせて頂く所存でございます

又月末の全教一斉にをいがけデーに併せにをいがけ強調の月とお打ち出し頂きいつもの月より思いを強くしてにをいがけに邁進する中宗教による聖戦という名の下にテロという暴挙が行われ大勢の犠牲者が出ました事は誠に痛ましく哀悼の念に堪えません 加えて報復という名の暴挙が行われようとしている今日親神様の心中は何と残念無念の思いに溢れているかと思う時論達の中の「今こそ人々に元なる親を知らしめ親心の真実と人間生活の目標を示し慎しみたすけ合いの精神を広めて世の立て替えを図るべき時」を実感し更なるにをいがけおたすけに思いを致し実動に邁進する覚悟でございます

何卒親神様には皆の心定めの真実をお受け取り下さいますして万たすけの上に尚も自由の御守護をお現し下さいますして世界中の人々の心に真実の親を思い起こさせ一列兄弟の理に目覚めさせ

て、神一条の精神で日々を通らせて頂かなければならぬ  
いと思つて居ります。



成人のに  
ぶい私に  
は仲々むつか  
しい事だと思  
いますが日々反省をしながら、教祖のひながたを見つめて、少しずつでも成人させて頂きたいと思つて居ります。おさしづに

反対する者も可愛い我が子。念ずる者は尚の事。なれど、念ずる者でも用いねば反対同様の者

(明治二十九年四月二十一日)  
とあります。親不孝者にならない様、心して通らせて頂きます。

## 世界情勢について

福東分教会 藤井保人

九月十一日、米多発テロ事件発生から、世界はこの事件を中心に様々な物事が進み、激変する日々が過ぎていきます。誰もが予期せぬ大惨事、民間人の犠牲者を多く巻き込み、悲しみと衝撃を与え、世界中の人々が不安にさらされました。

何故、こうした事が起つたのでしょうか。原因は多くあるかもしれませんが、全ては人間の心遣

## 秋季霊祭祭文

此の笠岡大教会の祖霊殿にお鎮まり下さいます 本席様の御霊初代真柱様並びに奥様の御霊二代真柱様の御霊中山家ご先祖の御霊大教会創設の祖上原佐吉大人八重刀自の御霊初代会長上原さと刀自の御霊二代会長上原伊助大人光刀自の御霊三代会長上原繁雄大人くに多刀自の御霊四代会長上原郁雄大人の御霊大教会草創の頃より長の年月歴代会長と共に苦勞下さいました役員部内教会長教人よふぼく信者の御霊諸々の御霊の前に会長上原理一慎んで申し上げます

御霊様方には早くから親神様教祖のお見定めにより身上事情を通してこの道にお引き寄せ頂かれ教祖ひながたを辿るべく道の先達として艱難苦勞の中も決して心倒す事なくむしろ悪因縁切り替えや悪因縁納消の時とばかりに親神様教祖に凭れて生きの限りたすけ一条の道を通り切られました

これの笠岡の道が創立百十周年を目前に控えた今日の結構な姿をお見せ頂いておりますのもひとえに親神様教祖の御守護お導きの賜である事は申すまでもありませんが又一つには御霊様方が私利私欲を捨てて神一条に真実の伏せ込みをして下さったお陰と日々朝に夕にと御礼を申し上げておりますが本日は秋の祖霊祭を執り行う定めの日柄でございますので言改めて御遺徳を称え御心をお慰め申し上げたいと御前に海川山野の草々の物を供えて只今はおつとめ奉仕者一同ゆかりある人々と思いを一つにして親神様の御前にて陽気に勇んでてをどりをつとめさせて頂きました

さて記念祭に向け先月二十六日二千人で祈願のおぢば帰りをさせて頂き実践項目の仕上げと共に更なる実動を誓い合わせて頂きました 加えて先日のアメリカで起こったテロによる暴挙を発端として世界戦争へ突入しかねない今日の世情を思う時論達に込められた「今こそ元なる親を知らしめ……世の立て替えを図るべき時」を実感し改めてよふぼくが一丸となって世界だすけに邁進すべき旬と悟らせて頂きました

何卒御霊様方には親孝心一筋に我が身捨ててかかる皆の真実誠の状を御覧下さいましてたすけ一条にますます拍車がかかり理の栄えをお見せ下さると共にお互いの実動を称え合いにぎやかな記念祭になりますようお見守りお力添えの程を一同と共に慎ん

い、心の埃が元になって生じた事だと思っております。やり返すという心の使い方が、報復という言葉を生み、その延長線上に争いがあり、被害は拡大し、事態は收拾のつかない状況になりかねません。まずは、当事者自身が反省をし、どこが悪いのか省みる努力が必要です。事が国レベルになるとこの些細な思案の仕方が難かしいかもしれませんが、お互いに協議を重ね合い、和解の方向へ進んでほしいと思います。

ある新聞に関連する記事が載っていました。  
「世界のどこかで平和が売っていたら、自分の国のために買いたい。」

これはアフガニスタンの首都カブールの少女が、語っていた願いだそうです。なんとも言いきれない、胸が痛む思いがします。一日も早く、世界中の人々が安心して暮らせる日が訪れるよう、一信仰者として陽気ぐらし世界建設を祈願するばかりです。

### 大教会だより

Ⅱ 教会指令 Ⅱ

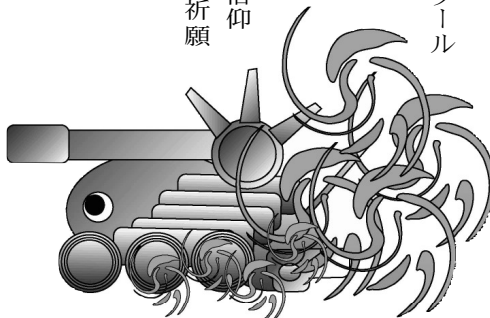
◎神殿建築願

深 安 分教会

☆鎮座祭 立教166年10月4日

☆奉告祭 立教166年10月5日

立教164年9月26日承認





## 第 7 2 8 期 修 養 科 募 集 要 項

### \* 修養科期間

立教164年12月1日～立教165年2月27日

### \* 教 養 掛

|      |         |            |
|------|---------|------------|
| 3ヶ月間 | 中 村 邦 義 | (大教会役員)    |
| 1ヶ月目 | 佐 藤 昌 平 | (呉 福 分教会長) |
| 2ヶ月目 | 竹 本 和 道 | (福 芦 分教会長) |
| 3ヶ月目 | 北 川 治 史 | (稻 倉 分教会長) |

### \* 募集要項

- ・ 志願者は、12月末日現在で満17歳以上で、下表の必要書類を携え、上級教会を經由して大教会に順序参拝すること。
- ・ 11月25日までに笠岡詰所に入所し、教養掛の面接を受けること。
- ・ 3ヶ月の修養期間を修了後は、大教会での修養科修了講習会を受講し、3月1日の昼食後に解散。

### \* 教 科 書 (必須)

『おふでさき』、『みかぐらうた』、『天理教教典』、『稿本天理教教祖伝』、『よふぼく手帳』。

### \* 参 考 書 (出来れば持参)

『おてふり概要』、『なりもの練習譜』(笛・打楽器または三曲)、『おやしき・史跡案内』。

### \* 携 行 品

おつとめの扇、筆記用具、認印、笛(男鳴物の講義で笛と小鼓の内、笛を選択する人のみ)。

### \* 服 装

ハッピー及び帯・バンド、長ズボン(又は、それに類するもの)、靴。



## ふたこと みこと

アメリカ同時多発テロ・狂牛病発生等々、心が暗くなる様なニュースが飛び交う今日この頃。少し目を転じて、我が家(教会)のホット・ニュースをお送りします。

去る九月十六日(日)、姪(姉の子)が結婚させて頂く事が出来ましたが、前会長夫妻(父母)と私と三人で出席しましたが、事件(ハプニング?)は帰る途中起こりました!

姉が時間の流れを考えて、帰りの飛行機の予約を入れておいてくれたのですが(その時刻は六時十分発です)、披露宴が予定時間を一時間以上オーバーして、終ったのが午後四時過ぎ。大急ぎで着替えをし、池袋駅へ、その時点で五時丁度。普通に行けば羽田迄五十五分です。これはギリギリだなと思い、電車の中で父母に、飛行機の出発時間にギリギリなので乗り換えの時は急いと言って、浜松町へ到着、そこからモノレールへ。八十四才・八十才の老夫婦が息子の後をヘタヘタと走ってくれます。私めは、浜松町のJALのカウンターで父母を見失わぬ様、「こっち、こっち」と手招きをしつ、搭乗手続(チケット購入)をし、走ってモノレールへ。羽田へ着くなり階上の搭乗口へ、エスカレーター・動く歩道を、又又、ヘタヘタゼイゼイ、老夫婦を急かしく走ってもらう。その間七〇メートル以上。呼び出しの放送が流れる中、飛行機内へ。五分前ギリギリセーフ……ヤレヤレ! 前会長(父)曰わく、「昔のわしなら死んどったぞ」とゼイゼイ。第二次世界大戦を九死に一生を得、その後一十八年前、心筋梗塞の発作で何度も死にかけた父。同じく戦争をくりぬけ、五十年程前に病気で死線をさまよった母。その二人が八十を過ぎて、揃って孫の結婚式へ出席し、息子に急かされながら(叱られながら?)ゼイゼイと息を切らして走りぬぎ、飛行機内へゴール!

何とありがたい事でしょう。

“へえ〜じゃがほんまにくたびれたのお〜”と言いつつ父母の姿。まあ、何はともあれ元気で十一月十九日には参拝させて頂きましょ。